

五角形シェードの照明スタンド誕生 汎用性と個性を両立

辻陽水 広島／鉄造形作家

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催LEXUS)は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

本プロジェクトは2016年、プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒット作を手掛け、熊本県のPRキャラクターくまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、生駒芳子氏(ファッションジャーナリスト、アート・プロデューサー)、下川一哉氏(意匠研究所)らをサポートメンバーに発足。以来、全国の若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への指定やロックフェラー家主権のチャリティイベントへの出品、上海での国際的な展示会への出品など、目覚ましい活躍を見せている。

3年目となった今回は、全国47都道府県から計50人の若き匠が選出。昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを手始めに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの制作に取り組んだ。



1月24日、プレゼンテーションにて

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

では、国内外の百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイナー関係者などに向けて自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ばたく足掛かり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。

また当日は、19年の新たな取り組みとして、全国の匠と、世界的クリエイター(コラボレーター)が、新たなプロダクトを制作するコラボレーションプログラムを発表。コラボレーターである隈研吾氏(建築家)、廣川玉枝氏(SOMARTAクリエイティブディレクター)、森永邦彦氏(ANREALAGE代表取締役社長・デザイナー)、辰野しずか氏(クリエイティブディレクター)、プロダクトデザイナー)が登場し、思いを語った。秋ごろには、完成したコラボ作品、過去のプロジェクトから生まれた匠たちの作品を披露するイベントを京都の地で開催することを合わせて発表。プロジェクトも一歩一歩進化している。

「伝統を守りながら」新しい「感覚やテクノロジー」を吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト」。

広島県選出の匠、辻陽水さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

生活に溶け込む鉄造形



完成プロダクト「ペンタゴンライト」

辻さんは広島市佐伯区の湯来町にあった鉄工所を機材ごと借り受け、アトリエとして使用。オーダーメイドで鉄製のインテリア品などを制作している。「見た目やデザイン」の格好良さを追うのではなく、実用性の裏付けがあり、暮らしに潤いを与えるような道具を形にしていきたい」と思いを語る。

25歳で鉄造形の世界に足を踏み入れた。明治大商学部を卒業し、数年間東京で働いた後、廿日市市に帰郷。アルバイト生活を送っていた頃、モノづくりが好きな父親が趣味で燭台(しょくたい)などの鉄細工を作っていたのを見て、興味を覚えたのがきっかけだった。父に道具の使い方を教わり、見よう見まねでやってみると、面白かった。「バーナーで鉄をあぶって曲げたり、切ったり、つないだりして形を整えていくプロセスが楽しくて、気が付

けば夢中になっていった」と振り返る。本気で鉄をやってみようと決めたのはその翌年。4、5年かけていくつかの鉄工所に勤務しながら、鉄造形の知識や技術を身に付けた。

鉄には硬くて強靱(きょうじん)で、冷たいイメージがある。しかし熱して磨くことで、繊細で美しいラインを引き出せるという。丹念に形を整えた鉄は、重厚感から解き放たれて、軽さやしなやかさを感じさせる。そのギャップが魅力で明かす。鉄でありながら、紙などの他の素材に見えるなど、いろいろな質感や素材感を表現できるのが醍醐味(だいごみ)だ。

鉄工所での修業を終え、2006年には宮島(廿日市市)のギャラリーで、「一輪挿し」をテーマに初の個展を開いた。日常の生活空間の中で、鉄の美しさを身近に感じてほしいとの思い

から、約30点に及ぶ鉄製の「一輪挿し」を制作。鉄を一度、さび付かせることで赤茶けた古めかしい雰囲気演出しながら、触った時にさびが指に付着しないように処理するなど、さまざまな工夫を凝ら



花びらを思わせるシェードが印象的

した。波みのある輝きを放ち、繊細で洗練されたフォルムを描く数々の一輪挿しが注目を浴びた。11年には南区のギャラリーで鉄のトレーをテーマにした企画展も開催した。

近年は県内で活躍する革細工職人とコラボしたラウンジチェアなども制作。個人客のオーダーを受け、ランプシェードや棚をはじめ、さまざまな生活用品を作り、好評を得ている。制作物は多彩だが、全てに共通してこだわっているのは、照明スタンドと点は、「シンプルで簡素なはずまい」であること。「無駄な装飾や線を全てそぎ落とした先に初めて、求める形が見えてくる。家のどこに置いてもなじみ、いつ見ても、いつまでも飽きのこないものを生み出し続けた」と力を込める。

鉄を加工 繊細さ表現

今回のプロジェクトで辻さんは、五角形のかさ(シェード)を備えた鉄造形による照明スタンド「ペンタゴンライト」を発表した。

コンセプトは「汎用(はんよう)性のある明かりの提



エリア・コンサルティングの様子。川又さんと話す辻さん



当初予定したサイドテーブル

案」。シェードと細長いポールをつなぐアームは角度や高さを自在に変えられる。シェードはポールから取り外すことも可能で、天井からつるすとペンダントライトになる。ポールは高さが60センチと1.5メートルの2タイプがあり、デスクライトとしても、フロアライトとしても使える。パーツを取り換えることで、暮らしのシーンに合わせた使い分けができるのが魅力だ。

「作品の企画から完成まで、試行錯誤の連続だった」と辻さんは振り返る。1月のプレゼンテーションに先立ち、昨年11月に広島市内であったエリア・コンサルティングで提案したのは、照明スタンドとは全く異なる、サイドテーブルだった。4本の細長い鉄脚が天板を支える構造。天板の素材には宮島細工の盆皿を使用しており、鉄脚から取り外し、盆皿としても単独で使えるのが特徴だった。

サポートメンバーの川又俊明氏は盆皿だけでなく、天板のバリエーションを増やすよう助言。「例えば天板をガラスのプレートに取り換えて、フルーツを盛り付けるとすてきだ。鉄製のトレーに換えて、鉢植えや花瓶を載せるとオブジェにもなる。辻さんの作品には、それを使う人の想像力を刺激する汎用性がある」と評価した。

課題は、宮島細工の美しさが上がった。

を強調したため、逆に鉄の存在感が薄れてしまった点だった。鉄造形作家としての辻さんの持ち味は、硬くて重いイメージのある鉄を加工し、しなやかさや軽さ、繊細さを表現すること。より高い汎用性と鉄造形としてのインパクトを併せ持つ作品を追い求めた結果、今回発表したペンタゴンライトに行き着いた。

シェードは、厚さ1.6mmの鉄板を切ったり、折ったりしながら五角形に整え、溶接した。ワイヤーブラシで表面を研磨して光沢を出し、火であぶり、青みを帯びた色合いに仕上げた。電源につなぐコードはアンティークな雰囲気のある布巻きタイプを使用。薄くて軽やかなシルエットのシェードは花びらを思わせ、ポールに絡まるコードは植物の茎を連想させる。「まるで観葉植物のように生活空間に溶け込む照明を生み出したかった」と力を込める。

プレゼンテーションでは、ペンタゴンライトの繊細な美しさと汎用性を示す画像をスライドショーで紹介。参加したバイヤーからは「繊細な印象だが、鉄本来の色合いや存在感もしっかり伝わっている」「シンプルでスタイリッシュ。使い続けるほど、味わいが深まりそう」といった声が上がった。

今後について辻さんは「プロジェクトを通じ自分の創作スタイルを再確認できた。陶器や紙のような質感を持つ鉄造形など、素材の枠を超えたプロダクトを次々に発表していきたい」と抱負を語る。



溶接作業の様子

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会



スーパーバイザー 小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大芸術学部放送学科に通う。「進め!電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。執筆活動の他、京都造形芸術大副学長、地域・企業のアドバイザー、下鴨茶寮主人などを務める。「くまモン」の生みの親でもある。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT